展　望

ニュー・ノーマル時代における国際会議の在り方とは

防衛大学校システム工学群　宮田　喜壽

COVID-19 感染の拡大を受けて、国際ジオシンセティックス学会（IGS）の活動の多くはオンラインで行われている。世界中に多くの支部を抱える IGS では、研究や技術の発展のみならず、人的交流を促進する意味において、国際会議は重要な意味を有する。このような状況下において、国際会議をどのように計画および運営していくかが課題になっている。この課題は分野を問わず諸学会共通であり、多くの方々が頭を悩ましているようである、IGS 日本支部でも今後課題になっていくと思われる。本文では、筆者が 2020 年 9 月より IGS 理事を拝命されたことをふまえ、ニュー・ノーマル時代における国際会議に在り方について私見を示させていただきたいと思う。この種の議論のきっかけになれば幸いである。

本題に入る前に、今回の理事選挙において、お世話になった皆様に感謝の意を表させていただきたい。立候補に際して、桑野二郎支部長をはじめとする IGS 日本支部幹事会の皆様にご推薦を、今期任期満了で理事をご退任された古関潤一先生、引き続き理事を務められている勝見武先生には立候補の手続きや資料作成などでご指導いただきました。投票に際しては、IGS 日本支部の個人会員・コーポレート会員の皆様に多大なるご支持いただきました。心より感謝申し上げます。これから IGS の発展に微力ながら貢献できるよう尽力致したいと思います。

本題に戻ります。最初に述べた通り、IGS の行事は概ねオンラインで行われている。つまりインターネット回線を使って、お互いの顔を画面上で確認しつつ、資料を共有しながら会議を行っている。このように書くと、「スタイルの移行に何の問題もない、移動もなくて良いことばかり」、「さようなら！オールド・ノーマル時代，ようこそ！ニュー・ノーマル時代」と感じられる方も多いかも知れない。しかし実際は、これまでの貯金、つまり人々が実際に一堂に会し、築き上げてきたものを切り崩しながら何とかやっているレベルではないだろうかと感じている。やはりオンライン会議では人と人との交流は大変難しい。そのような中、IGS 理事になって私の最初のタスクは、virtual technical event（オンラインで行う学会行事）についての学会指針を作成することとなった。オンラインの活用方法で戸惑う支部や委員会が多い中、どんなシステムを使って、どのように計画・運営を行えばよいかの拠り所を作りなさいという指示だと理解している。私自身、IGS 理事会など、いくつかの場面でオンライン会議システムを使用している。セキュリティ問題のため職場で使えないという個人的事情はともかく、このようなシステムをそのまま国際会議に適用するには、上述のとおり課題があると感じている。

ニュー・ノーマル時代における国際会議の在り方を考えるには、オールド・ノーマル時代を整理すると良いのではないかと考えた。そこで、自身がどのように国際会議に参加してきたかを振り返ることにした。以下がその概略である。（　）は各ステップでの私の感情である。

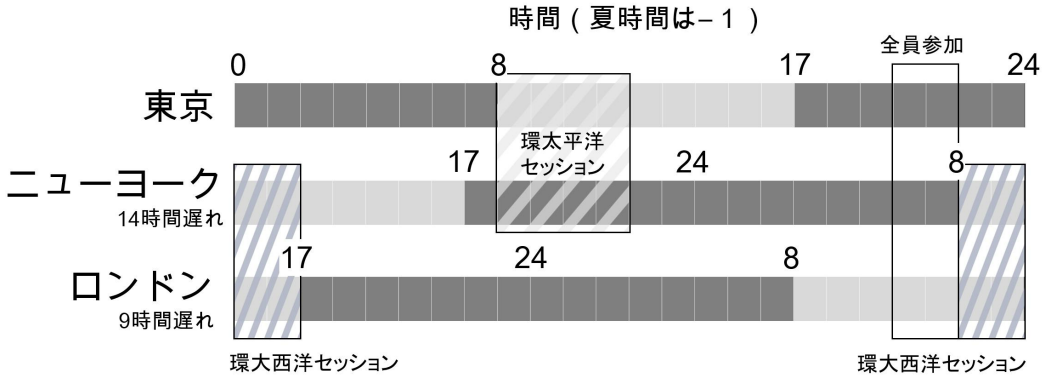
１．飛行機で現地に移動し、ホテルに向かう（少しの緊張感とワクワク感）
２．登録ブースで自分の名前を告げて会議資料を入手（ひとまず安心）
３．大ホールで開催される開会式と基調講演に参加（これからの会議への期待感高まる）

４．興味のあるセッションの会場に移動（アクセスが良いと満足、その逆は不満）
５．発表を聴講（著名な方の発表に憧れたり、活発なディスカッションに興奮したり）
６．自分の発表と質疑応答（なんとか終えて「ほっ」としたり、自分の出来に反省したり）
７．展示ブース見学（予想以上の情報やヒットな記念品が得られると小さな幸せを感じる）
８．会議中の飲食・バンケット（英語でのコミュニケーションに苦労しつつも非日常に高揚感）
（　）の中については、皆さんも類似の気持ちをもたれた経験があるのではないだろうか。

国際会議への参加には、情報発信と収集、そして人的交流という大きな目的がある。その目的はともなく、上記したような経験やその時に感じた感情や記憶が、また国際会議に行きたいと思わせるのではないだろうか。従って、オンライン国際会議用のシステムとしては、発表する・発表を聴くという基本機能をしっかりさせることは当然として、参加者の方にワクワク感や期待感、高揚感を感じてもらえるような機能も大事ではないだろうか。自分の街を画面に入力すると仮想旅行体験をしてから会場に入れるとか、実際の会場で発表する・発表を聴くような臨場感のある画面設定など、遊びの要素をシステムに導入する必要があると考えている。

以上の視点と別に、IGS で大切になるのは企業展示である。最近の VR を活用したオンライン展示システムでは、多くのバーチャルブースから自分の興味のあるところをすぐに見つけ担当者と話せる機能を有するものが実用化されている。そのようなシステムを活用すれば、コーポレートメンバーの皆さんの満足度向上にもつながると考えられる。この問題については、日本支部の皆さんの意見も聞きながら、どのようなシステムが理想であるかを検討したい。

さて、仮にオンラインシステムがよくなったとしても克服が難しいのが時差を考慮した行事の運用である。この問題の対応策として考えられるものを下図に示す。世界中の参加者がどうにか時間を共有できるのは日本時間で午後 8 時から 10 時の間くらいである。そこに全員参加のプログラムを組み込むのが良いのではないだろうか．あとは環太平洋セッションと環大西洋セッションのように、アジアー北南米、北南米－欧州の時間帯の組合せでセッションを企画するのも一つの考えだと思う。オンラインシステム会議システムや時差問題の件で良いアイデアがございましたら、是非 miyamiya@nda.ac.jp までご連絡いただければ幸いである。



最後になりますが、私の国際活動は、補強土の国際会議：IS Kyushu や国際地盤工学会の技術委員会：TC-9 に始まっている。落合英俊先生、大谷　順先生にはその時以来、引き続きご指導いただいている。また、2005 年から 1 年間カナダで私を受け入れてくださった IGS 元会長 Richard J. Bathurst 先生にも国際活動について様々なことを教えてもらっている。以上の先生方にご恩返しする意味でも IGS 理事の仕事をしっかり行っていきたいと考えている。